

“学び方のクセ”について考える (視覚・聴覚・身体感覚)

こんにちは、ふれあい学級スクールカウンセラーの高橋昭人です。

今年は4月後半からすぐに暑くなってしまったので、春が短かったように感じます。なんとなく粘り気を感じるようなあの暖かさも好きなのですが、お天気はどうしようもないので、日々汗をかきながらお仕事に励んでいます。日によって寒暖の差も激しいので、皆様もお身体ご自愛ください。

連想ゲーム

突然ですが、簡単な連想ゲームです。“海水浴”という言葉から、どのようなことが連想されますか。自分が連想したものに一番近いものを以下の3つから選んでみてください。

1. 大量の水・広い・青色・たくさんの人・太陽の光
2. ザザーン・パシャパシャ・カモメの鳴き声・笑い声
3. 暑い・しょっぱい・潮の香り・砂の手触り・楽しい感じ

学び方のクセ

人間には、いろんなタイプがあります。いろんな分け方があるのですが、その中に“学び方のクセ”ともいえるものがあります。皆さんは、何番目の項目が自分にとって一番伝わりやすかったでしょうか。

何かを説明するという行為は、その人の“学び方のクセ”がよくわかります。人によってまったく違う説明の仕方になるので、何人かに同じことを説明してもらうと面白い結果になったりします。

人間は、目（視覚）、耳（聴覚）、手・身体（身体感覚）の3つで約85%の情報を入手しています。ほとんどの人は、その3つを時と場合で使い分けながら生活しているのですが、その3つのどれを主にするかは、人によって違います。普段から両手を使って生活しているけど、どちらが器用かというところどちらか決まっている、利き手のようなものが五感にもあるんだと考えると想像しやすいかもしれませんね。

視覚優位・聴覚優位・身体感覚優位

1番を選んだ方は、視覚優位タイプです。どちらかということ目で見えて学習するのが得意とされます。何か説明されるときは、言葉だけで伝えられるより、図や絵を見た方がスムーズかもしれません。

2番を選んだ方は、聴覚優位タイプです。どちらかということ耳で聞いて学習するのが得意かもしれません。言葉での説明や指示が理解しやすく、会話を好む傾向が

あります。

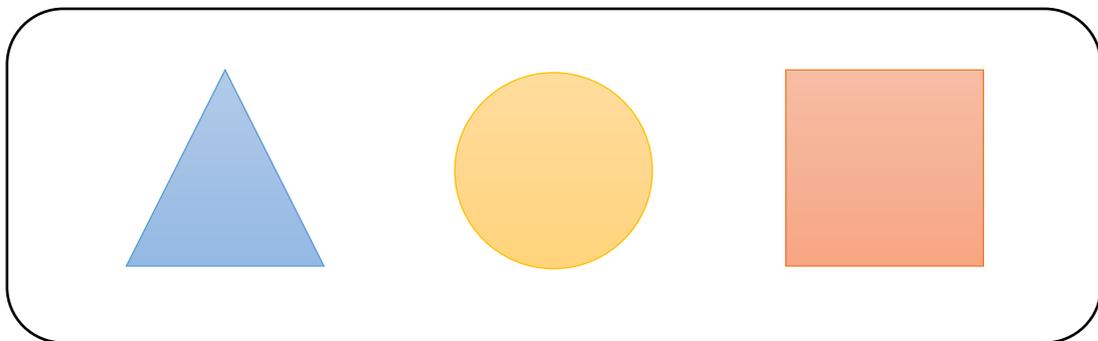
3番を選んだ方は、身体感覚優位タイプです。このタイプは、身体を使って体験的に学ぶことを得意とする人です。身体感覚優位タイプは、少し説明が難しいのですが、こういったタイプの方は、細かいことを言葉で説明するより“まずは実際に自分で体験してみる”というパターンの学習を得意とします。

例えば、野球のバッティングを教える際に「最初に右足を前に出して、構え方は腰を落として、ひじを引いて。ピッチャーが片足を上げたタイミングで右足を上げて、バットを振ってボールに当たった瞬間…」などの細かい説明をされてもよく分からないかもしれません。このタイプの方は、感覚的な言葉を使うことが多く、少し古いですが、元巨人軍の長嶋茂雄さんなんかは、典型的ですね。身振り手振りをしながら「ボールをジーっと見続けて、ビュンと来たら腰をグッと落として、バーンと打つ」などのザックリとした説明になることが多いです。文字にするとちょっと変な感じがするのですが、実際にはこういった説明をされて、とりあえずやってみた方が分かりやすいタイプの方は、結構多いのではないのでしょうか。

このタイプ分けは、VAK モデルと言われています。人間は、3つの感覚（視覚・聴覚・身体感覚）を状況に合わせて使い分けており、どの感覚も普段から使っているのですが「人によって処理しやすい情報が違うんだ！」と考えるのがこのモデルの特徴です。例えば、身体感覚優位の子どもの長々と言葉で説明しても伝わらないことが多いですし、聴覚優位の人には地図を渡すより道順を教えたほうが分かりやすかったりします。自分の“学び方のクセ”を知り、得意な情報処理を積極的に使っていくと、勉強などのときに効率よく進めていけると思います。

覚え方のクセ

もうひとつ、簡単なチェックです。下の画像を10秒ほどで覚えた後に、見本なしで違う白い紙に覚えている限り（形・配置・色など）書いてみてください。一人でやるより、誰かと一緒にすると違いがよく分かって面白いので、ぜひチャレンジしてみてください。



“覚えて再現する”という能力は、人によって得意不得意があるので「ちょっと簡単すぎるなあ」と思う人から「全然できなかった…」と思う人までいると思いま

す。これは“どれだけ正確に出来たか”はあまり重要ではありません。そもそも提示された情報が視覚情報なので、視覚情報の処理が苦手な人にはちょっと不利になっています。あまり出来なかった人も気にしないでくださいね。

こちらのチェックは“覚え方のクセ”をみるためのものです。重要なのは“どのような方法でこれを覚えようとしたか”なのです。これは、人によって実に多種多様だと思います。

例えば、「三角・丸・四角」や「青・黄・赤」と頭の中で何度も口ずさんで覚えようとする人（視覚→聴覚情報に変換）、見たままを写真のように頭の中で記憶しようとする人（視覚→視覚）、指で空書しながら覚える人（視覚→身体感覚）、中には「信号機」という体験的な記憶と色情報を結び付けたり、「おでん」というイメージで形を覚えようとしたりする人もいるかもしれません。

人によって、こういった情報に変換した方が覚えやすいのかは、かなり個人差があります。漢字を覚えるのが苦手な子には、こういった工夫が効果をあげる可能性があります。

自分のタイプを知ること・子どものタイプを知ること

いかがだったでしょうか。今回は、簡単なテストなので、あまり正確性はなく、目安として考えていただければ、いいかなあと思います。また、あくまで人間の一部分を一つの切り口から見た観点であるということも覚えていただければ、幸いです。

子どものタイプもそうですが、親御さん自身のタイプも非常に重要です。基本的に違うタイプの人間に物事を説明する場合、ちょっと苦労することがあります。親と子の場合、似たタイプであることも多いですが、やはり違う人間なので全く違うタイプの場合もあります。

どの親御さんも、子どもと暮らす中で自然と「この子はこういったタイプだな」と感じ取りながら生活しておられると思います。こういったタイプ分けは、あまり決めつけ過ぎない方が良いのですが、ひとつの視点として「あれ、この子、こういったところもあるのかも」「じゃあ、ちょっとこういうことしてみようかな」という風に活用されるのが良いと思います。そういった新しい視点によって、お子さんや自分自身への新しい発見があったのなら、カウンセラーとして嬉しい限りです。

参考文献

- 岡田尊司(2013). 子どもが自立できる教育 小学館
本田恵子(2006). 脳科学を活かした授業を作る 子どもが生き生きと学ぶために みくに出版